

[原著論文]

## エンパワーメント指標考察 - ジェンダーと開発の領域において -

千葉たか子<sup>1)</sup>

### Study of Empowerment Measurement In the Context of Gender and Development

Takako Chiba<sup>1)</sup>

#### Abstract

This paper is to attempt to join in the discussion on measuring empowerment in the context of gender and development. Though empowerment is the crucial issue to be discussed, it is not clearly defined, nor measured. Literature argues empowerment as something good on its own without concrete definitions. Empowerment entails a process of change. Changes can be measured, and empowerment as well, by qualitative means.

The international community has been working on poverty alleviation programmes. Their approaches have diverted several times and currently, empowerment becomes the first and most essential requirement of both planning and development. Meanwhile, gender has become the eminent issue, as gender studies advances. The Fourth World Conference on Women of 1995 in Beijing has declared that women's rights are human rights. Gender implies a power structure of the control and the controlled. Empower is the vital issue to achieve gender free society.

I discuss empowerment in this paper and suggest four dimensions of empowerment: social, economic, psychological and physical empowerment. I also offer indicators to measure empowerment.

(J. Aomori Univ. Health Welf. 8(1): 27-36, 2007)

キーワード：エンパワーメント、指標、測定

Key words : empowerment, indicator, measurement

#### はじめに

1960年代より、途上国の経済開発を推進するための様々な開発経済パラダイムや理論が提示されてきた。国の経済成長に重点をおいた経済開発中心の時期、経済偏重の歪みから人間の基本的な人権に焦点を当て福祉的政策を尊重した社会開発の時期、そして1990年代よりは、人間中心型開発を前面に打ち出すようになってきた。

国連開発計画は1990年より『人間開発報告書』を刊行し、人間開発の度合いを測るための指標として、人間開発指数(HDI<sup>(i)</sup>)、ジェンダーに視点を当てたジェンダー開発指数(GDI<sup>(ii)</sup>)とジェンダー・エンパワーメント測定(GEM<sup>(iii)</sup>)、そして貧困を測る人間貧困指数(HPI<sup>(iv)</sup>)などを次々と開発・提示してきた。これらの指数は、国

の状況を表すものとして極めて重要な意義を持ちながらも、世界全体で1億人とも言われる貧困層の女性の実像を示すには機能していない。

昨今の開発協力のキーワードは、「エンパワーメント(「エンパワーメント」は筆者は、「社会的に周辺化された人々の内在的な力を引きだし、状況を変えて行く過程」と定義する。なお、エンパワーメントについての多様な見解や議論については、後述する本稿2-2の部分で再度議論を重ねている。)[「持続可能な開発<sup>(v)</sup>」][「住民参加<sup>(vi)</sup>」]である。ジェンダーに公正な開発のため、特に貧困層の女性たちを対象とした開発プロジェクトは女性たちのエンパワーメントを目的としているものが多くなった。しかし、エンパワーメントは重要な概念ではありな

1) 青森県立保健大学健康科学部社会福祉学科

Department of Social Welfare, Faculty of Health Sciences, Aomori University of Health and Welfare

がら、エンパワーメントあるいは「力」についての議論が充分になされているとは言い難い状況がある（佐藤 [2005], 太田 [2005]）。途上国の女性たちの過酷な状況を変えるために、彼女たちの現実に基づいた開発理論とエンパワーメント議論が望まれる。

本稿では、このような流れを背景に貧困層、特に南アジアの農村の女性たちを視野にいれ、エンパワーメントと「エンパワーメントが起こった」と言えるエンパワーメントの指標を考察してみたい。

## 1. 開発のパラダイム

### 1-1 開発のパラダイムの変遷

第二次世界大戦後、アジア・アフリカ・ラテンアメリカなど「南」の国々の経済成長の低迷と人口の爆発的増加などの問題がいわゆる「南北問題<sup>註vi)</sup>」として国際社会の課題となった。

1950・60年代、西欧・北米・日本など「北」の国々は、近代化＝西欧化をモデルとして「南」の国々の経済開発を進めようとした。政府主導で、資本集約的・輸入代替型工業化や経済インフラの整備を中心に、国民総生産の増大や生産性の向上などを目指した。しかし、この近代化政策、資本主義拡大路線は、「南」の国々を「テイク・オフ（離陸）」<sup>註vii)</sup> させはしなかったし、経済発展の成果がトリクルダウン<sup>註ix)</sup> することもなかった。「南」の国々の経済は成長するどころか、むしろ、南北間、階層間、ジェンダー間の経済格差が拡大した。

1970年代に入ってから、拡大した貧困層の生活を改善するという福祉的ないわゆるBHN（Basic Human Needs：人間の基本的ニーズ）路線へ変更していく。BHNとは、衣食住・教育・医療という人間として生きていくうえで必要な基本的なニーズを意味する。このBHNパラダイムは、貧困層の生活改善に一定の効果をもたらした。しかし1970年代の石油ショック、それに続く累積債務問題、さらに80年代にはサヘル地域の慢性的な干ばつと内乱や政治的混乱で、生活レベルが悪化した国が多かった<sup>註x)</sup>。このような状況のもと、経済開発よりも「社会の質」を向上させることが重要であるとする考え方が出てくる。これが社会開発である。すなわち、貧困層の基礎教育、栄養、衛生、リプロダクティブ・ヘルス、家族計画、安全な水など<sup>註xi)</sup>を改善していこうという取り組みである。

一方、経済発展の利益は女性と男性の両方に公平にもたらされるのではなく、女性は経済発展から取り残されている事実が明らかにされてくる。すなわち、「女性の貧困化」である。その問題に対処すべく女性を対象にする「開発と女性：WID<sup>註xii)</sup>」アプローチが出てくる。

1980年代後半からは、国連開発計画（UNDP<sup>註xiii)</sup>）が

「人間開発」という概念を打ち出してくる。すなわち、開発の中心にあるのは人間であり、経済開発や社会開発は人間開発の手段として位置づけられる「人間中心型発展」である。国連開発計画は、1990年より「人間開発報告書」の刊行を始め、所得・出生時の平均寿命・教育の到達度を基に人間開発指数をあらわし、人間開発の度合いの測定を試みている。

このような流れから、近年は人間中心の開発のために、社会環境の改善を手段とするようになり、また「持続可能な開発」「住民参加」「エンパワーメント」が開発協力の場のキー概念となってくる。

### 1-2 「開発と女性：WID」から「ジェンダーと開発：GAD<sup>註xiv)</sup>」へ

国連開発計画は、1995年の『人間開発報告書』で「ジェンダーと人間開発」を特集している。ここには、貧困が女性に集約していることを示すデータがいくつも挙げられている。たとえば、貧困状態にある世界13億人のうち70%が女性であること、女性の労働市場参入率の低さ、平均賃金の差、失業率の高さ、初等・中等教育の総就学率、成人の識字率、一人当たりのGDP、栄養失調の状態にある割合などである。女性と男性の大きな格差を示す多くの統計が、女性は男性に比してより劣悪な状況にあることを示している。国連開発計画は、「人間開発は、ジェンダー問題が解決されない限り危機に瀕する（国連開発計画 [1995]）」としてジェンダー平等を重要な施策としている。

途上国の女性が国際社会の課題となるのは、1970年代以降である。取り組みはまず、女性を開発の「受益者」として、女性を対象にし、開発の過程に女性を「取り込む」という「開発と女性：WID」アプローチに始まる。しかし、このWIDアプローチは、女性の教育、雇用、健康の向上など状況改善に貢献したことは評価されるものの、もともと多忙な途上国の女性にいっそう過重な負担を強いる結果となるプロジェクトもあった。

WIDアプローチがうまく機能しなかった大きな理由は、女性がおかれている社会的環境や性による役割分担を考慮しなかった<sup>註xv)</sup>からである。女性の状況を改善しようとする場合、女性がおかれている社会的・経済的に不利な状況や固定的な性別役割を個別に把握することが不可欠である。女性と男性の力の構造を問い直し、差別的な制度や社会システムを変えることが必須である。これが「ジェンダーと開発：GAD」アプローチである。そして、すべての分野のすべての種類の（レベルの）法律、政策、プログラム（施策）にジェンダーの視点を取り入れる「ジェンダーの主流化（gender mainstreaming）」が打ち出されてくる。

### 1-3 女性の権利は人権である

開発の場にジェンダーの視点を取り入れることが重要視されるようになった背景に、フェミニズム運動の高まりがあることも看過できない。

フェミニズム運動は、男性と同等の権利を求める運動(第一波フェミニズム)から始まり、特に1970年代以降、女性の権利は人権であるとする運動(第二波フェミニズム<sup>(ixvii)</sup>)へと変質してきた。すなわち、女性と男性の関係に関わる問題は私的領域のできごととして扱われてきたものを、人権というレベルで考えようとするものである。ここに、大きなパラダイムの変換があったことを確認しておかなければならない。

このような第二波フェミニズムの運動の高まりを背景とし、「女性」が国際社会の問題として認識されようになってきた。女性がその中心議題となった国際会議は、1975年の第1回世界女性会議(メキシコ会議)に始まる。ここで、女性の平等・開発・平和への貢献のためのメキシコ宣言がなされる。1995年の第4回世界女性会議(北京会議)のもっとも重要な成果は、女性の権利問題が前面に出され、「女性への暴力は人権侵害である」ことが確認され、「エンパワーメント」概念が議論されたことである。

開発の領域と女性学の領域が出会い、ジェンダーと開発が重要な施策となっていくのである。ジェンダー平等とは目的ではなく、力関係を変えていこうとする政治的な過程である。したがって、GADアプローチは、社会的に不利な立場にあるもののエンパワーメントを必須とする。

## 2. 開発とエンパワーメント

### 2-1 エンパワーメントの「力」

エンパワーメント=Empowermentという言葉をまず英語として理解すれば、Empower=em+power+mentとなる。それは「(誰かが誰かに)力をつける」と他動詞として和訳するのが妥当である。

しかし、エンパワーメントを「力をつける」とする定義には反論がある。なぜならこの定義には「誰かが誰かに力を賦与する」という意味合い含まれるからであろう。エンパワーメントとはもともと内在する力を(自分で)引き出すものであり、他者の働きかけ(恩恵や援助)で力を得るのは、本来の意味でエンパワーメントではないという主張である。森田ゆりは、「エンパワーメントとは『力をつけること』ではない。力のある者がいない者におすそ分けする」のではない(森田[1998])という。確かに「力」は、人から人へ分けてあげたり、もらったりできる「物」ではない。しかし、森田の場合、エンパワーメントの「力」をどのように定義するか議論がなく、エンパ

ワーメントに関しての議論も深められていない。また、「力」は他者との関係の中で生じるものであり、自然発生的にエンパワーメントが起こるものではない。この点を深めた議論が課題であろう。

開発の文脈におけるエンパワーメントの「力」については、カピールが詳細な議論をしている(カピール[2001])。カピールの「力」を太田美帆は以下のように整理している。

- ① "Power over": 資源や物事を支配したり、他者の意思決定を左右する影響力。力をゼロサム的に捉える。
- ② "Power to": 知識や技術といった人的資本(Human Capital)。個人の能力開発は他者との関係性に変化を与えない。
- ③ "Power with": 人びとが連帯することによって発現する社会関係資本(Social Capital)としての力
- ④ "Power from within": 各個人に内在する自尊心や自信など精神的な力。誰もが潜在的にもっているが、他者との関係性や社会通念によって抑圧され顕在化されていない場合が多い。

(太田美帆<sup>1)</sup>[2005: 5])

「力」は、対象となる人とその人を取り巻く人々との間に生ずる関係である。その関係のあり方により「力」にも相違が生じる。カピールの「力」の議論においては「選択する能力(選択しない力も含む)」がその中心概念である。ただ、「選択」もまた独立して議論されるべき概念であり一筋縄ではいかない。カピールの「力」に3つの様相・側面(dimension)があると考えられる。それらは、資源(resources)、作用(agency)、成果(achievement)である<sup>(ixviii)</sup>。

ただ、エンパワーメントを目的としたプロジェクトを計画する場合、上記のうちから一つだけ選択的に女性たちに、「この力」をつけようと設定することは難しい。実際、カピールはこの点に関してはあいまいなままで使用するのが「都合がよい」こともあるといっている(太田[2005: 9])。上記の力のいくつかは、互いに関連し合っている。またエンパワーメントを目的としてエンパワーメントが起こったプロジェクトよりも、プロジェクトの目的は別にありながら結果としてエンパワーメントが達成されている事例が少なくない(佐藤[2005: 7])ということをお案すれば、「力」についての議論は必要ではあるがその議論に終始してしまうと机上の空論に陥る危険もある。

### 2-2 エンパワーメントの議論

佐藤寛は、「エンパワーメント」は一般に「良いもの」「望ましいもの」としているだけで、その定義に関しての深

い議論がないままにつかわれている状況があると指摘している(佐藤[2005:7])。エンパワーメントのパワー=力は「物事を決定し、実行し、実現する力」であり(佐藤[2005:211])、その力は「個人の能力向上の結果として自ずと湧き上ってするものではなく、他者との関係性の変化によって獲得しなければならない」という。そして、「気づき」「能力開発」「能力を発揮する場の獲得」をエンパワーメントの3要素として提示し、「既存の社会関係・社会制度を変革することなしには、持続的な「エンパワーメント」が獲得されたとは言えない」とする立場をとっている。すなわち、エンパワーメントのパワーは力であり、力は政治的なものである。したがって、エンパワーメントは既存の力関係に変化が起こらなければならないとする。

久木田純は、「社会福祉、発展途上国の開発、医療と看護、教育など様々な領域で」使われているエンパワーメントについて議論をし、「社会的に差別や搾取を受けたり、自らコントロールしていく力を奪われた人々が、そのコントロールを取り戻す過程である(久木田[1998])」としている。

この視点は、開発領域での第一人者であるフリードマンと共通する。フリードマンは、「貧困な人は、制度的、組織的に力を剥奪されてきた状態(デス=エンパワーメント)にある」とする(フリードマン[1995:4])。したがって、エンパワーメントとは、「その力の基盤となる資源へのアクセス機会を得ること」となる。この場合、力とは、社会的な力、国家権力、政治的な力、経済的な力をさす。

以上の議論から、筆者は、エンパワーメントの「力」は「物事を決定し、実行し、実現する力」という佐藤の定義を用い、エンパワーメントを「社会的に周辺化された人々の内在的な力を引きだし、状況を変えて行く過程」と考える。以降、本稿においてはこの理解で議論を進めていくものとする。

### 2-3 ジェンダーと開発とエンパワーメント

ジェンダーは一般に「社会的・文化的に作られた性差」と定義されている。しかし、ジェンダー問題はそれほど単純ではない。ジェンダーは、社会における男女の固定的な役割(ジェンダー分業)、経済力の格差、上下関係等、過去からの女性差別の意識に根ざした構造的問題である。そしてその本質は、社会的に強い立場の者が、弱い立場の者へ権力をふりかざす、パワー・アンド・コントロール(力と支配)構造によるものである。力の問題であり、支配・被支配の力の構造である。したがって、ジェンダー平等を目指すということは、力の構造を変えていくことであり、そのためには「弱者」のエンパワー

メントは不可欠となるのである。

## 3. エンパワーメントの指標

### 3-1 人間開発指数、ジェンダー開発指数、ジェンダー・エンパワーメント測定<sup>(注xviii)</sup>

国連開発計画は、人間開発の基本的な指標として、人間開発指数を開発した。その背景には、以下のような状況が存在した。すなわち、かつては国の経済開発の度合いを測るのに国内総生産(GDP)や国民総生産(GNP)を用いてきた。しかし、これらには開発の中心になるのが人びとでありながら「人間」が反映されていない。人びとの幸福が中心におかれる開発という人間中心型の開発を目指すため、「人間」が見えてくるような人間開発を測る指標として人間開発指数が開発された。この人間開発指数は、人間の基本的な能力を測る指標であり、具体的には所得・出生時の平均寿命・教育の到達度を基に算出される。国連開発計画は世界の170数カ国の人間開発指数を計算し、一覧にした。この一覧からは経済開発と人間開発の様々なありようを読むことができ、人間開発を進める上で大きな役割を果たした。

この人間開発指数の開発は画期的ではあったものの、逆に指数で表現するために大胆な単純化が行われてしまっている。さらに、そこにはジェンダーの視点が入れられていない、女性の姿が見えてこないという批判が出てくる。

そこで、ジェンダーの視点を取り入れたジェンダー開発指数が開発される。ジェンダー開発指数は人間開発指数と同じく基本的な能力の達成度を測定するが、女性と男性の間でみられる達成度の不平等に注目したものである。基本的な能力におけるジェンダー格差が大きければ大きいほど、その国の人間開発指数に比べてジェンダー開発指数は低くなる。例えば、国連開発計画が1995年にジェンダーを特集にした開発報告書を見てみよう。これによると、人間開発指数の上位5カ国は、順にカナダ、アメリカ合衆国、日本、オランダ、フィンランドであるが、これらの国々のジェンダー開発指数は、それぞれ9位、5位、8位、20位、2位である。ジェンダー開発指数の順位に着目すると、上位から順に、スウェーデン、フィンランド、ノルウェー、デンマーク、アメリカ合衆国で、これらの国々の人間開発指数は、それぞれ10位、5位、7位、16位、2位である。あるいは、人間開発指数は4位であるオランダのジェンダー開発指数は20位であり、人間開発指数が25位であるバルバドスのジェンダー開発指数は11位である。このように人間開発指数の順位とジェンダー開発指数の順位は必ずしも一致せず、両者の順位之差が極めて大きな国もある。人間開発指数の順位とジェンダー開発指数の順位に大きな差がある国

は、ジェンダー格差が大きいといえる<sup>(ixix)</sup> (文末資料1を参照)。

次に開発されたのはジェンダー・エンパワーメント測定である。これは、経済、政治、専門職への女性の参加の度合いを測定するものである。「経済」は購買力平価ドルで換算された一人当たりの所得、「政治」は国会で占める女性の割合、「専門職」は専門職、技術専門職、管理職に占める女性の割合である。ただし、国より、国政レベルの行政機構は異なるし、専門職に就くには文化的障壁もあり、一律に計算できないという困難さがある。このジェンダー・エンパワーメント測定値をやはり国連開発計画の1995年の報告書にみると、1位がスウェーデン、2位がノルウェー、3位がフィンランド、4位がデンマーク、5位がカナダとノルディック諸国が上位国を占める。これらの国々の人間開発指数は、それぞれ10位、7位、5位、16位、1位で、人間開発指数とジェンダー・エンパワーメント測定値の順位は必ずしも相関関係はない。人間開発指数が高いながらもジェンダー・エンパワーメント測定値の順位が極端に低いのが日本である<sup>(ixxx)</sup> (文末資料2を参照)。

人間開発指数とジェンダー・エンパワーメント測定値の順位から、経済的な力とジェンダー平等は必ずしも連動しないということがわかる。豊かでも女性のエンパワーメントが遅れている国があり、貧しくともジェンダー平等が進んでいる国がある。これは、国の経済力にかかわらずジェンダー平等を目指すことが可能であることを示している。

### 3-2 エンパワーメントを測る

以上、述べたように国連開発計画では、人間開発の状況を人間開発指数で、あるいはジェンダーの視点を取り入れたジェンダー開発指数やジェンダー・エンパワーメント測定などの指標で示そうと挑戦してきた。しかし、

このジェンダー開発指数やジェンダー・エンパワーメント測定は、「女性の相対的な社会的立場や生活の質を左右する強力な決定要素 (国連開発計画 [1995: 82])」<sup>(ixxi)</sup> だとしても、マクロな視点によるものであり、貧困女性の個々の姿が見えてこない。また、国連開発計画が認めているように、「ジェンダー開発指数とジェンダー・エンパワーメント測定は測定可能なものだけを捉えている。したがって地域社会の生活や意思決定への参加、家庭内での資産の消費、人間としての尊厳や個人の安全などにかかわるジェンダーの不平等という重要な側面は含まれない (国連開発計画 [1995: 82])」。

国全体でジェンダーやエンパワーメントに関する傾向を把握することは意義のあることである。しかし、世界人口の約10%近い貧困層の女性たちの状況を改善するためには、女性たちの現実を反映させたエンパワーメントの議論も緊急度が高い。

次節では、先行研究としてエンパワーメントの測定を試みた Hashemi, Schuler & Riley の指標と藤掛洋子の指標を例をとって挙げ、その指標としての有効性を以下に検討したい。

### 3-3 Hashemi, Schuler & Riley の指標

Hashemi, Schuler & Riley は、バングラデシュの貧困な農村で活動を展開している2大NGOであるグラミン銀行<sup>(ixxii)</sup>とBRAC (バングラデシュ農村向上委員会<sup>(ixxiii)</sup>)が実施しているマイクロクレジットのプログラムを比較研究し、マイクロクレジットのプログラムが農村女性のエンパワーメントに効果を挙げていることを検証した。藤掛は、調査を行った集落の基本統計を基に、広範な観察や面接を通し、その成果をエンパワーメントを示す8つの指標 (indicators) としてまとめている。これら8つの指標は以下の通りである。右は、坪井ひとみによる和訳である (表1参照)。

表1 Hashemi, Schuler & Riley によるエンパワーメント指標と坪井ひとみによる和訳

|   | エンパワーメント指標の英語表記                                    | 和訳                 |
|---|----------------------------------------------------|--------------------|
| ① | Mobility                                           | 移動性                |
| ② | economic security                                  | 経済的保証              |
| ③ | ability to make small purchases                    | 小さな物品の購入能力         |
| ④ | ability to make larger purchases                   | 大きな物品の購入能力         |
| ⑤ | involvement in major household decisions           | 家庭内における意思決定への参加度合い |
| ⑥ | relative freedom from domination within the family | 家庭内の支配からの相対的自由度    |
| ⑦ | political and legal awareness                      | 政治や法律に関する知識        |
| ⑧ | involvement in political campaigning and protests  | 政治活動や抗議行動への参加      |

出典：Hashemi, Schuler & Riley [1996: 638-639] と坪井ひとみ [2004: 10] をもとに筆者作成。

Hashemi, Schuler & Riley の8つの指標は次のように機能する。例えば① mobility では、市場、医療機関、映画、村の外など具体的な場所が挙げられ、女性がそこへ一人で行ったことがある場所が3ヶ所以上あると、① mobility の項目において、「エンパワーメントしている」という判定がなされる。② economic security では、女性が自分の家あるいは土地をもっていれば1点、生産手段をもっていれば1点、銀行口座を持っていれば1点、その口座のお金が事業をしたり金融に利用されたりすれば1点として、合計が2点以上だと② economic security の項目において「エンパワーメントしている」と判定する。このように、8つの項目ごとにそれぞれ細かな下位項目があり、合計点数が設定値以上でその項目において「エンパワーメントしている」と判定をする。8つの項目中、5項目以上において、点数があれば女性は「エンパワーメントしている」グループに分類される。なお、これら8項目のうち、④ ability to make larger purchases と⑤ involvement in major household decisions には、他の6つよりも大きな比重がおかれている。

Hashemi, Schuler & Riley が提示するエンパワーメント指標の8つの項目は、エンパワーメントの経済的側面、社会的側面、政治的側面に対応するものと筆者は考える。すなわち、②と③、④は購買力に関する項目で、女性の経済力を示すものである。⑤と⑥は、家庭内での女性の発言力の大きさを示すものであり、家庭内における力関係すなわち政治的・社会的エンパワーメントである。⑦と⑧は、家庭の外における女性の行動力や発言力を示すものであり、政治的エンパワーメントであり、同時に社会的エンパワーメントでもある。そしてまた、公共の場で発言できる自信は、心理的にもエンパワーメントされていることを示す。

Hashemi, Schuler & Riley のこの指標は、農村女性の現実から出発したもので、説得力があると筆者は考える。

### 3-4 藤掛洋子の指標

藤掛洋子は、インドのICAインド<sup>(ixxiii)</sup> が実施したマンガレオン農村総合開発プロジェクト、マリのNGOカラの女性の生活を向上させるためのプロジェクト、そしてバングラデシュのグラミン銀行とインドSEWA<sup>(ixxiv)</sup> を調査対象とし、これらのNGOのプロジェクトをエンパワーメントの視点から考察している。これら4つのNGOが実施しているプロジェクトは女性のエンパワーメントを直接の目的にしたものではないが、結果としてエンパワーメントにつながっていることを示した。そして、エンパワーメントの指標となり得る項目が一定程度通文化的に有効であったと結論づけている。

この研究において、藤掛がエンパワーメント指標の仮

説として挙げたのは以下の10項目である（表2参照）。

表2 藤掛洋子のエンパワーメント指標の仮説

|   | エンパワーメント指標の仮説            |
|---|--------------------------|
| ア | 世帯内外で発言できるようになった         |
| イ | 女性のリーダーシップの形成            |
| ウ | 男性から女性への家庭内暴力に対する抵抗      |
| エ | リプロダクティブ・ヘルス/ライツに関する意識変容 |
| オ | 対象社会のジェンダー規範に対する疑問の提示、抵抗 |
| カ | 世帯内外の男女間の関係性の変容          |
| キ | 男性の女性に対する意識や行動の変容        |
| ク | 女性の自信の獲得                 |
| ケ | 村長や夫、子供が女性たちの活動を認める      |
| コ | 新たな活動目標を持つ               |

出典：藤掛洋子 [2003: 72] をもとに筆者作成

藤掛は、この仮説を基にパラグアイの村で女性の聞き取り調査を進め、女性たちの「語り」を分析し、エンパワーメント指標を検証している。ここで、抽出されたエンパワーメント指標は以下の12項目である（表3参照）。

表3 藤掛洋子が提唱するエンパワーメント指標

|   |              |
|---|--------------|
| A | 参画・参加した      |
| B | 発言した         |
| C | 意識が変化した      |
| D | 行動した         |
| E | 連帯した         |
| F | 協力した         |
| G | 創造した         |
| H | 新たな目標をもった    |
| I | 交渉した         |
| J | 満足した         |
| K | 自信をもった       |
| L | 運営・資金管理を行なった |

出典：藤掛洋子 [2003: 85] をもとに筆者作成

藤掛は、この12項目にさらに「私は変わった」を重要な項目として付け足しているが、エンパワーメントの中心に「変化」があることを考えるとき、この項目は追加というより優先順位の高い項目と筆者は考える。

藤掛は、さらにこれらの指標を基に、エンパワーメントの点数化を試み、面接対象となった女性一人ひとりの数値及び対象グループの数値を計算している。藤掛はこれを「定性的データの可視化の作業」と呼んでいる。

確かに、数値化することは、「科学的」として説得力を持つことが多い。しかし、上記の12の指標の一つ一つを



同等の比重で、同列に扱い加算できるのかという疑問が残る。エンパワーメントのように測り難いものを無理に数値化する必要はないと筆者は考える。

以上、エンパワーメントを測るための指標としての試行研究の例を2つ挙げ、それらの有効性について検討してみた。いずれの場合も実際に女性への直接面接などの一次資料に基づいた結果から導きだされた指標であり、具体的かつ現実的であると考える。

### 3-5 エンパワーメントの指標

先に、筆者はエンパワーメントを「社会的に周辺化された人々の内在的な力を引きだし、状況を変えて行く過程」と定義した。したがって、エンパワーメントが起こったかどうかを判断する際、女性とその女性に関わる他者とのパワーすなわち「力関係の変化」がカギとなる。したがって、「エンパワーメントが起こった」と判断する場合、女性たちが自分自身の変化を、そして他者が女性の変化を認識することが、指標を考える場合の重要なポイ

ントとなる。なお、ここでいう女性に関わる他者とは、一次レベルでは世帯の構成員である。二次レベルでは女性の生活範囲・活動範囲である村あるいは地域共同体の人びとであり、これには、開発プロジェクトの仲間ももちろん含まれる。三次レベルでは、さらに拡大した範囲の人びとである。例えば、市場で出会う人びと、開発プロジェクトの外部の関係者、銀行口座を持っている女性の場合は銀行の職員などが含まれよう。他者とはまた、個人でありうるし、集団でもありうる。

筆者は、インド国西ベンガル州の州都コルカタにある女性のためのNGO・オンクル・カラと知り合い、この数年交流を重ね、コルカタ訪問に際しては、頻繁にオンクル・カラを訪問し、そこで研修を受けている女性と歓談する。その際に語られた女性たちの発言を4つの領域に分類した。その4つは、エンパワーメントの1) 社会的側面、2) 経済的側面、3) 心理的側面、4) 身体的側面を示すものとする。以下は、女性たちの具体的な発言の例である(表4を参照)。

表4 エンパワーメントを示す発言の分類

|    | エンパワーメントの領域 | 具体的な発言                                                                    |
|----|-------------|---------------------------------------------------------------------------|
| 1) | 社会的エンパワーメント | 仲間・友人が増えた                                                                 |
|    |             | 自分の名前では呼ばれるようになった                                                         |
|    |             | グループとして行動するようになった                                                         |
|    |             | 世帯内外における発言力が増した(ほか)                                                       |
| 2) | 経済的エンパワーメント | 収入ができた/増えた                                                                |
|    |             | 自分の収入が家計に貢献しているのが実感できる                                                    |
|    |             | 自分の財布を持つようになった(これは、物理的に財布を持つことを意味するのではなく、土地、家屋の不動産を持つことや自分名義の銀行口座をもつことなど) |
| 3) | 心理的エンパワーメント | 自分の心が安定していると感じられるようになった                                                   |
|    |             | 世帯内で居心地がよくなった                                                             |
|    |             | 夫と落ち着いて話すことができるようになった(ほか)                                                 |
| 4) | 身体的エンパワーメント | 食事の量が増えた                                                                  |
|    |             | 食事の質を考えるようになった                                                            |
|    |             | 身体的に楽になったのを感じる                                                            |
|    |             | 病院へ行かなくなった(ほか)                                                            |

出典：オンクル・カラの女性たちの発言をもとに筆者作成

この筆者がまとめたオンクル・カラの女性たちの発言を前述したHashemi, Schuler & Rileyの指標と藤掛洋子の指標と筆者の提示した指標とに比較・対照させそれぞれの相違点と共通点を明らかにしてみた。Hashemi, Schuler & Rileyは、調査で得られた結果をある程度集約したかたちで8つの項目を指標として使っている。これに対して、藤掛は、女性たちの具体的な語りを利用し、

12 + 1 = 13項目を指標として選び取っている。そこで、Hashemi, Schuler & Rileyの項目と藤掛の発言と筆者の提示するエンパワーメントの4つの側面を対応させてみた(表5を参照)。

この比較対照からは、藤掛がエンパワーメントの社会的側面に重点をおいているような印象を与える。一般に女性と開発の脈絡でエンパワーメントを議論する場

合、経済的エンパワーメントを強く打ち出すのが常であるが、藤掛の12項目の中でエンパワーメントの経済的側面としては最後の「運営・資金管理を行なった」だけである。ただ、藤掛が対象としたのは生活改善プロジェクトに参加した女性たちで、そのプロジェクトの目的の一つに所得創出がある。したがって、そのプロジェクトに参加していること自体がエンパワーメントの経済的側面と見ることが可能であり、特に抽出しなかった可能性がある。また、藤掛があげた12項目には入っていないが、このプロジェクトの成果として女性たちが、「衛生について考えるようになった」「栄養に考えるようになった」「食事の内容が変わった(野菜が増えた)」と発言しており、女性たちが衛生・栄養に意識するようになったことがわかる。これは、健康について意識が高まったことを示すものであり身体的なエンパワーメントとみることができる

と筆者は考える。

また、Hashemi, Schuler & Riley は、女性たちが集団を組織し、交渉にあたるあるいは政治的な意識を強めていくことを重視しているのがわかる。エンパワーメントは「力関係の変化」をめざすものであることを考慮すれば、政治的な意識改革に重点があるのは極めて妥当なことと考える。

以上述べたように「何が起こったらエンパワーメントが起こったといえるのか」は困難な課題である。エンパワーメントの4つの側面のどれが強調されるかは、当該社会の社会的・文化的環境、規範、価値観などの影響を受ける。したがって、エンパワーメントの指標が藤掛のいうように「通文化的に有効」かどうかははまだ検討の余地がある。

表5 Hashemi, Schuler & Riley と藤掛洋子とエンパワーメントの4つの側面との対応

| Hashemi, Schuler & Riley が利用した8つの項目                                    | 藤掛が取り出した発言                                           | 千葉によるエンパワーメントの4つの側面 |
|------------------------------------------------------------------------|------------------------------------------------------|---------------------|
| mobility:<br>移動性                                                       |                                                      | 社会的                 |
| economic security:<br>経済的保証                                            |                                                      | 経済的                 |
| ability to make small purchases:<br>小さな物品の購入能力                         |                                                      | 経済的                 |
| ability to make larger purchases:<br>大きな物品の購入能力                        | 運営・資金管理を行なった                                         | 経済的                 |
| involvement in major household decisions:<br>家庭内における意思決定への参加度合い        |                                                      | 社会的、心理的             |
| relative freedom from domination within the family:<br>家庭内の支配からの相対的自由度 |                                                      | 社会的、心理的             |
| political and legal awareness:<br>政治や法律に関する知識                          | 発言した<br>行動した                                         | 社会的                 |
| involvement in political campaigning and protests: 政治活動や抗議行動への参加       | 参画・参加した<br>連帯した<br>創造した<br>協力した<br>交渉した<br>新たな目標をもった | 社会的                 |
|                                                                        | 意識が変化した<br>自信をもった<br>満足した                            | 心理的                 |

出典：Hashemi, Schuler & Riley[1996] と藤掛洋子 [2003] と千葉たか子 (2007：予定) を基に筆者作成

## おわりに

途上国の大都市のスラムであるいは疲弊した農村で、抑圧に押しつぶされそうになりながらも、昨日よりは今日、今日よりは明日へと現実を変えようと努力している女性たちがいる。彼女たちを訪問し交流を重ねて行くと、彼女たちに起こっている大きな変化を認めることができ

る。それは、彼女たちの努力の成果である。その変化をエンパワーメントとして捉え、言語化していくのは困難きわまりない作業である。友人としての「おしゃべり」の場では生き生きと語りながら、筆記具あるいはレコーダーをもって聞き取りをするという「形式的な」場になると口数が少なくなることを経験した研究者は少なくな



いだろう。また、女性たちが自分自身を語るときには、多様な言い回しが用いられる。限られた発言の中からあるいは多様な（時には雑多な）発言の中から鍵となる発言を適切に「切り取る」のは難しい。

「何が起こったらエンパワーメントが起こったといえるのか」これは、大きな課題である。女性のエンパワーメントをめざすプロジェクトの関係者にとっては特にプロジェクトの評価に直接関わることであり、エンパワーメントを測る物差し作りが緊急の案件となっている。筆者は、エンパワーメントには、社会的、経済的、心理的、身体的という4つの側面があると考え、女性たちの発言が、これらのどれかを示すものである場合、その女性は「エンパワーメントした」と広義な概念を提示した。

エンパワーメントの4つの側面のどれが強調されるかは、当該社会の社会的・文化的環境、規範、価値観などの影響を受ける。したがって、エンパワーメントの指標が藤掛のいうように「通文化的に有効」かどうかははまだ検討の余地があるものの、パイオニア的な研究の積み重ねは、今後、大きな成果につながるものと確信する。本研究は、科学研究費・平成18年度科学研究費補助金（基盤研究（C）、課題番号 18530435）によるものの一部である。

（受理日：平成19年5月2日）

注 i) Human Development Index

注 ii) Gender-related Development Index

注 iii) Gender Empowerment Measure

注 iv) Human Poverty Index

注 v) 1987年、ブルントラント委員会の報告書では「将来の世代がそのニーズを充足する能力を損なわないように現在の世代のニーズを充足させる開発」と定義されている。

注 vi) 「住民参加」は重要ではあるものの定義が困難な概念である。国連開発計画は、1993年の報告で特集として扱っている。「住民参加」に関する議論は、R.チェンバースのPLA（参加による学習と行動）開発理論が優れている。

注 vii) この用語は、イギリスのロイド銀行の頭取であったO.フランクが最初に使用し広まった。

注 viii) Walt Whitman Rostor アメリカの経済学者の経済発展理論。

注 ix) 「経済が成長すればその利益は貧困層へも滴り落ち、結果として全体がうるおう」という主張でしたり理論といわれる。

注 x) 1980年代の10年は、ラテンアメリカやサハラ以南のアフリカ諸国にとって「失われた10年」と呼ばれている。

注 xi) 他に、女性、子ども、環境、社会的公正、経済的公平、社会参加など多くの領域に渡る

注 xii) Women in Development

注 xiii) United Nations Development Programme

注 xiv) Gender and Development

注 xv) この例として、E.ボゾラップのアフリカにおける調査、スリランカのマハヴェリ河開発事業などがある。

注 xvi) 第二波フェミニズムの思想にも多様な理論があるが、本稿はその性格上、その議論には立ち入らない。

注 xvii) カピールがいう3つのdimensionであるresources、agency、achievement

も丁寧な議論が必要な概念である。しかし、本稿ではこのままで議論を進める。

注 xviii) 国連開発計画ではこれら3つの指標の他に、人間貧困指数（Human Poverty Index）も開発しているが、本稿の性格上、これには立ち入らない。

注 xix) 詳細は、文末資料1を参照されたい。

注 xx) 詳細は、文末資料2を参照されたい。

注 xxi) Grameen Bank、創始者はムハマド・ユヌス博士（2006年ノーベル平和賞受賞）

注 xxii) Bangladesh Rural Advancement Committee

注 xxiii) The Institute of Cultural Affairs（文化事業協会）

注 xxiv) Self-Employed Woman's Association（自営女性協会）

## 引用文献

1) 太田美帆 (2005) 「開発援助とエンパワーメント論の系譜」アジア経済研究所『ワールド・トレンド』No.120、2005年9月、p.5

2) 藤掛洋子 (2003) 『準客員研究員報告書 人々のエンパワーメントのためのジェンダー統計・指標に関する考察』(独) 国際協力機構 ,p.72,p.85

## 参考文献

江原由美子・金井淑子編 (1997) 『フェミニズム』新曜社  
キャロライン・モーザ (1996) 『ジェンダー・開発・NGO: 私たち自身のエンパワーメント』新評論、久保田賢一・久保田真弓訳

太田美帆 (2005) 「開発援助とエンパワーメント論の系譜」アジア経済研究所『ワールド・トレンド』No.120、2005年9月、pp.4-9

久木田純 (1998) 「エンパワーメントとは何か」久木田純・渡辺文夫編 (1998) 『エンパワーメントー人間尊重社会の新しいパラダイム』現代のエスプリ、至文堂、No.376、pp. 10-34

国連開発計画 (1997) 『UNDP 人間開発レポート1997

貧困と人間開発』国際協力出版会  
 国連開発計画 (1995)『UNDP 人間開発レポート1995  
 ジェンダーと人間開発』国際協力出版会  
 国連開発計画 (2005)『UNDP 人間開発レポート2005  
 岐路に立つ国際協力：不平等な世界での援助、貿易、安  
 全保障』国際協力出版会  
 佐藤寛 (2005)「第1章 援助におけるエンパワーメント  
 概念の含意」佐藤寛編 (2005)『〈経済協力シリーズ代207  
 号〉援助とエンパワーメント - 能力開発と社会環境変  
 化の組み合わせ』アジア経済研究所、P. 3-24  
 ジョン・フリードマン (1995)『市民・政府・NGO「力  
 の剥奪」からエンパワーメントへ』新評論、斉藤千宏・  
 雨森孝悦監訳  
 田中由美子・大沢真理・伊藤るり編著 (2002)『開発と  
 ジェンダー エンパワーメントの国際協力』国際協力出  
 版会  
 千葉たか子 (2007)「オンクル・カラとエンパワーメント -  
 インドの女性のための自立支援民間団体の活動-」『青森  
 県立保健大学雑誌』青森県立保健大学、第8巻 第1号、  
 2007年6月 (予定)  
 坪井ひろみ (2006)『グラミン銀行を知っていますか 貧  
 困女性の開発と自立支援』登用経済新報社  
 坪井ひろみ (2004)『グラミン銀行の社会開発における役  
 割に関する研究』山口大学大学院東アジア研究科、博士  
 論文  
 長崎暢子 (1997)「第7章 20世紀のインド社会と女性」押  
 川文子編 (1997)『南アジアの社会変容と女性』アジア経  
 済研究所、pp. 223-251  
 藤掛洋子 (2003)『準客員研究員報告書 人々のエンパ  
 ワーメントのためのジェンダー統計・指標に関する考察』  
 (独) 国際協力機構  
 森田ゆり (1998)『エンパワメントと人権 ころの力の  
 みなもとへ』部落解放・人権研究所

Baruah,A.(ed.)(2003)"Women in India: An Exhaustive  
 Study," Anmol Publications, Delhi  
 Goswami,O. & Malik,K.(2006)"A Shocking Divide," India  
 Today, August 14, 2006, pp.34-40  
 Hashemi,S.M.,etal.(1996)"Rural Credit Programs and  
 Women's Empowerment in Bangladesh," World Devel-  
 opment, Vol. 24, No.24, pp.635-653  
 Kabeer,N.(2001) "Resources, Agency, Achievements: Re-  
 flections on the Measurement of Women's Empower-  
 ment," Discussing Women's Empowerment: Theory and  
 Practise, SIDA, Studies, 2001  
 Kabeer,N.(1994)"Reversed Realities: Gender Hierarchies  
 in Development Thought," Verso, London

Latta, L.(2005)"Women Development in India: A Statisti-  
 cal Profile," Manak, Delhi  
 Moser,C.O.N.(1993)"Gender Planning and Development:  
 Theory, Practice & Training,"Routledge, London  
 Reddy,N.(eds.)(2005)"Women in Development: Chal-  
 lenges and Achievements," Serials Pub., Delhi,pp.  
 Sanhita (2002) "Support Services to Counter Violence  
 Against Women in West Bengal: A Resource Directory,  
 " Sanhita, Kolkata  
 Sinha,D.(2005)"Empowering Women: A Catalyst in So-  
 cial Development," N.Reddy(eds.)(2005) Women in  
 Development: Challenges and Achievements, Serials  
 Pub., Delhi, pp.4-20

文末資料1 人間開発指数の上位国とジェンダー開発指  
 数の上位国

| HDI<br>順位 | 国名      | HDI<br>1992 | GDI<br>順位 | GEM   |
|-----------|---------|-------------|-----------|-------|
| 1         | カナダ     | 0.950       | 9         | 0.891 |
| 2         | アメリカ合衆国 | 0.937       | 5         | 0.901 |
| 3         | 日本      | 0.937       | 8         | 0.896 |
| 4         | オランダ    | 0.936       | 20        | 0.851 |
| 5         | フィンランド  | 0.934       | 2         | 0.918 |
| 6         | アイスランド  | 0.933       | 注         | 注     |
| 7         | ノルウェー   | 0.932       | 3         | 0.911 |
| 8         | フランス    | 0.930       | 7         | 0.898 |
| 9         | スペイン    | 0.930       | 34        | 0.795 |
| 10        | スウェーデン  | 0.929       | 1         | 0.919 |
| 11        | オーストラリア | 0.927       | 6         | 0.919 |
| 12        | ベルギー    | 0.926       | 18        | 0.852 |
| 13        | スイス     | 0.925       | 19        | 0.852 |
| 14        | オーストリア  | 0.925       | 10        | 0.882 |
| 15        | ドイツ     | 0.921       | 注         | 注     |
| 16        | デンマーク   | 0.920       | 4         | 0.904 |
| 25        | バルバドス   | 0.900       | 11        | 0.878 |

出典：国連開発計画 [1995：86-87、173] をもとに筆者作成  
 注：データなし

文末資料2 人間開発指数の上位国とジェンダー・エン  
 パワーメント指数の上位国

| HDI<br>順位 | 国名      | HDI<br>1992 | GEM<br>順位 | GEM   |
|-----------|---------|-------------|-----------|-------|
| 1         | カナダ     | 0.950       | 5         | 0.655 |
| 2         | アメリカ合衆国 | 0.937       | 8         | 0.623 |
| 3         | 日本      | 0.937       | 27        | 0.442 |
| 4         | オランダ    | 0.936       | 7         | 0.625 |
| 5         | フィンランド  | 0.934       | 3         | 0.722 |
| 6         | アイスランド  | 0.933       | 注         | 注     |
| 7         | ノルウェー   | 0.932       | 2         | 0.752 |
| 8         | フランス    | 0.930       | 31        | 0.433 |
| 9         | スペイン    | 0.930       | 26        | 0.452 |
| 10        | スウェーデン  | 0.929       | 1         | 0.757 |
| 11        | オーストラリア | 0.927       | 11        | 0.568 |
| 12        | ベルギー    | 0.926       | 21        | 0.479 |
| 13        | スイス     | 0.925       | 17        | 0.513 |
| 14        | オーストリア  | 0.925       | 9         | 0.610 |
| 15        | ドイツ     | 0.921       | 注         | 注     |
| 16        | デンマーク   | 0.920       | 4         | 0.683 |
| 25        | バルバドス   | 0.900       | 12        | 0.545 |

出典：国連開発計画 [1995：86-87、173] をもとに筆者作成  
 注：データなし